

## 善光寺詣 瀬下敬忠

本稿は「長野」二四五号平成一八年二月に小山丈夫氏が資料紹介したものによる（転載許可済み）。奥書に安永三年（一七七四）とある。花月文庫に安永二年の奥書のあるものがあり、「長野県教育史第八卷資料編二」に翻刻があるが、一部文言が異なる。

御堂のうしろへ下りて年越としこしの社・骨納堂を過こつおさま、左の方の山へのぼり、かるかや桑門だうしんの往生寺常念仏、此寺は山の半腹はんぷくにして諸堂の群衆くんじゆ、市店の商してん、賈一眼下あきないあきないにして目を歛ましむ、それより遙やうに羊やう、腸ちゆうたる坂を登り山また山へ分入わけ候、麓ふもとにてさしも高しと見し嶺ミネも忽たちまちに足下そつかに見おろし、雲を分け霧きりを穿うがてゆく山は人面しんめんに從したかひて起り雲ハ馬頭の傍おこに生くもず共謂はたうつべし、荒安あしのしたといふ處より飯繩山いっなへのほる【飯綱ノ字昔ヨリイカニシテカ繩ト云字ヲ書ク、尤謬タレトモ今改ルニ及ハス書之也】此権現こんげんは靈験れいげんあらたにして、また魔所ましよ也、服忌ぶつぎ又ハ穢氣えききあるもの詣もする事能ぼんひはずと也、凡卑ぼんひの身を恐れてのほり不申候、それより平地へいぢにしてかゝる山上べうに縷々れんれんたる原野げんやある事珍はぢしき

土地也、又大なる池水あり、かずくの村里谷々の間にあり  
となん幽かすかに人煙立じんえんのぼる、少しツゝ登りくとがくして戸隠山に至  
る、其はしめハ町屋にしてそれを過て宝光院権現也、祭神  
表春命うははるのみこと・本地將軍地蔵とかや、坊舎十七、右の方十町はかり  
行て中院権現、祭神思兼命ちういんこんけん・本地釈迦まつるかみおもひかねのみこと、坊舎廿四、外に日之  
御子社あり、猶山深く分入れなをば溪雲常けいいうんに雨を帯あめび山木おの  
づから風をふく含みいと寂さびし、比丘尼石より女人禁制也、奥院  
権現こんけん、祭神手力雄命まつるかみたちからおのみこと・本地正觀音ほんちしやうくわんおん、坊舎十二、少シ行て窟殿いはどの  
九頭龍権現くずりゅうこんけん・本地辨財天へんざいてん、合て戸隠四社権現と称し奉る由な  
り、此窟いわやは底も知らぬ大洞穴たいとうけつへ曲りくほらあなて廻楼くわひちうをつくり掛け、  
毎日黒米壺升を炊たきて丑刻覆面うしのこくふくめんしてそなへ奉る、甚おそろしく  
神秘なる由承伝候、御供所ごくうしよハ小庵はしやうあんにしていと侘わひし、其庭にハへ山  
上より精冷せいれいたる瀧落たきてさながら白布をかけたることし、景色  
いとふおもしろし、此山はむかしハ高御倉山たかみくらやまといひて歌枕うたまくらな  
る由、また裏山うらやまといへるハまわりくよて十三里余の山奥おくにし  
て百日精進しやうじんして詣もつる也、中々庸人ようじんの及ふ事にあらず、遙はるかに望  
むに黒姫山くろひめハ北ほつ方ほうの雲うに包かみ、荒倉嶽あらかうたけは乾けん隅ぐの霧きりに埋うむ、  
此山昔きじんハ鬼神住きじんしを平維茂將軍退治たいちし給たまひし紅葉狩もみじがりの

旧跡きうせきとかや、それよりまたもと来し道へ下り帰り申候、此ふるきあと  
外いろくなる名所古跡も承候へとも、筆筒やたての墨すみもいつしか  
かわき、筆ちびも禿れ候まゝ書もらし申候、近内以参貴面二御咄はなし  
可申上候、頓首